『國民新報』1939年7月2日

眞劍の態勢

のので、にいてののがはれたが、がしたりにいては、するでも、せられてするでも、これをするのでも、どうもさがりないのではないかとはれたのはであつた。であるからとふのはさのりないにはならない。のをごつこにするなのさではのはいとはねばならない。

は、がにのがするようなことはないんだと、にするからのがんだせゐかもれないが、しのにみがじたらそのものがむことをしなくてはならない。

とはのでのないではなくてのとふであるが、をばとてふものでなければにつにはなれない。そしてのが、わがをつてるのだとふで一寸のをもせないのがのだそうであるが、このはずしもにつたことではない。にするはふもなり、、、をめとして々のはべてであらねばならない。スポーツやなどは一のやうであるが、のがなければそのとはしないものである。

のでをしのをしたものでなければ、いざとふに、としてにつことはないのである。

々のはりに不[眞]面目ではないか。でないか。やごとがぎるのではないだらうか。できふひの一や一にもさが、もつとうんとらなくてはならない。してやにして、ちとにして々はもつと、うんとにならなければならない。も、ももは、にけるものやうにばかりでさがたりなくてはにいりとさねばならない。

もづいたが、のやのもひつてにやるべきだとふ。

の！これこそは々のなのである。